

淡海生涯カレッジの20年を振り返って

ーカレッジのはじまりとこれからー

神 部 純 一

(滋賀大学社会連携研究センター長)

1. 淡海生涯カレッジのはじまり

「淡海生涯カレッジ」は、平成6年から3年間にわたって行われた文部省（現・文部科学省）による「地域における生涯大学システムの研究開発」をきっかけに、滋賀大学生涯学習教育研究センター（現・滋賀大学社会連携研究センター）と滋賀県の共同研究の中から生まれた学習機会である。

「生涯大学システム」とは、「広域的なサービス網」を構築するための仕組みであり、「各都道府県（生涯学習推進センター等）を中心に、県域内の各市町村、社会教育施設や大学・高等学校等、民間教育事業者等との幅広い連携・協力により構築される、総合的な学習サービス提供システム」である。このシステムの構築のため、文部省は、（1）学習機会提供機関相互の連携・協力の在り方について、（2）学習成果を生かした社会参加活動に対する支援の在り方について、（3）現代的課題に関する学習活動の充実方策について、（4）その他必要な事項、についての調査、研究開発を行うこととし、平成6年10月に12県（青森県、宮城県、秋田県、群馬県、神奈川県、新潟県、石川県、岐阜県、兵庫県、島根県、広島県、福岡県）に調査研究を委嘱したのである。

平成6年といえば、滋賀大学に生涯学習教育研究センター（現・滋賀大学社会連携研究センター）が設置された年であり、大学の研究センターとしてやるべきことは何か、地域社会に対してどういう貢献ができるのか等、まだまだ研究も事業の中身も具体的に見えていない時期であった。そういう時に、この委嘱プロジェクトが始まったのである。

このプロジェクト内容を見た時、私も、センターのスタッフも「これは大学の知的資源を生かした地域貢献の一つのモデルとなるのでは」と感じ、すぐに大学から滋賀県教育委員会へプロジェクトに手をあげるよう働きかけることにした。その結果、センターが中心となって研究計画を立て、大学と教育委員会が協働で事業を実施するという一方で、上記プロジェクトの2年目に文部省より委嘱を受けることになったのである。

2. 淡海生涯カレッジ開校までの経緯

淡海生涯カレッジの開発においてまず問題となったのは、何をテーマに大学システムを創るかである。これについては、滋賀県の地域特性を生かしたもの、すなわち琵琶湖を中心とする環境問題に焦点をあてることにした。

続いて、このテーマに関して環境学習機会提供者を対象に調査を行ったところ、環境学習の機会の大半は、環境問題への意識の啓発を主目的とした、1回

限り、1日コース、平日昼間の講義、見学、講演会等であった。また、環境学習機会提供者は、放送メディアや体験活動を含む多様な方法での学習機会を、大学、企業や専門研究機関と連携して実施する必要性を感じていることも明らかとなった。

こうした調査結果を得て、生涯大学システムの方向性は決まった。「継続的、体系的に学べる環境学習機会」の創出である。カレッジの研究開発チームは、そのシステムの実現に向けて試行錯誤を繰り返し、最終的に、今の淡海生涯カレッジのシステムにたどり着くことになる。

カレッジのシステムの特徴としては、大きく2点があげられる。一つは、学習者があるテーマを深く学ぶことができる、体系的なシステムであること、そしてもう一つは、地域の多様な機関間のネットワークを重視したシステムであること、である。

近年、市民の学習ニーズは高度化・専門化している。こうしたニーズに応える学習機会には体系性が求められる。カレッジでは、特色のある3つの講座を開設し、受講生がそれぞれの講座内容を学ぶことで学習を深めていけるようにした。その3つの講座とは、身近な環境問題を学ぶ中で、環境についての問題意識を高めることを目的とする「①問題発見講座」、実験や実習を通して、体験的に環境問題に迫る「②実験・実習講座」、そして理論的に環境問題を深める「③理論学習講座」である。環境問題に対する「意識」を高め、実際に「経験」することで問題を明確にし、その上で、最後に「理論」を学ぶことで、環境問題に対する理解を深めていこうというわけである。

しかし、この3つのバラエティにとんだ講座を一つの機関のみで企画・実施することはかなり難しい。そこで研究開発チームは、地域の学習機関にそれぞれの得意分野を生かした講座を開設してもらい、それを結びつけることでこの問題を解決しようと考えた。こうして、公民館が「問題発見講座」を、高校と生涯学習センターが「実験・実習講座」を、そして大学が「理論学習講座」を担当し、全体として体系的で、実りある学習機会を提供する淡海生涯カレッジのシステムができあがったのである。



その後津市をモデル地域に、生涯学習教育研究センターと教育委員会は、慌ただしく事業実施に向けての準備段階に入った。しかし、これが順調に進んだかというとは決してそうではなかったのである。学習機関として選定された公

民館、高校、市の生涯学習センター、そして大学が、初めてカレッジの運営委員会で顔を合わせた時のことである。実施機関の関係者からは、「公民館は、地域の住民に学習の場を提供するのが基本であるから、地域外の住民のための学習の場を確保することはできない」また「半年にもわたるこうした学習機会にそうそう受講者が集まるとは思えない」等、カレッジの実施に対して否定的な意見が相次いだ。事務局サイドと実施機関との間での激しいやりとりは何時間も続き、とりあえずやるという結論には達したが、全員が納得したわけではなく、多くの不安や不満を抱えながらの船出だったのである。

大学内部にもカレッジの実施に向けて大きな壁が立ちふさがっていた。カレッジには「土曜コース」と「平日コース」の2コースがあり、「理論学習講座」を担当する滋賀大学では、「土曜の特設講座」か、科目等履修生制度を利用して平日の「正規の授業」を受講させることで、2つのコースに対応しようと考えていた。ところが大学は、前例がないということで、「淡海生涯カレッジ」のシステムの中に大学の「正規の授業」を組み込むことに難色を示したのである。そのため、センターのスタッフは、大学の職員を対象に「淡海生涯カレッジ」についての説明会を何度も開き、システムの中に「正規の授業」を位置づけることに理解を求め続けた。その結果、最終的には「問題なし」という回答を得ることができ、カレッジの実施に向けてまた一歩前進することができた。

こうした状況の中で、平成8年7月20日の淡海生涯カレッジ開講に向けての準備が急ピッチで進められた。そして、6月半ばに受講生の募集が開始された。募集定員は80名。私もあわただしい中、果たしてどれだけの人がこのカレッジに関心をもってくれるのか、不安と期待が入り交じった2週間を送ったものである。しかし、その不安も前半だけで、日増しに受講希望者は増え続け、募集締め切り日には、実に160名を超える申し込みがあった。抽選が行われ、最終的に100名の受講生が決定した。

そして、大津市内にある琵琶湖研究所で、開講式と第1回目の講義が行われた。私も出席したが、熱心に講義に耳を傾け、ノートをとる受講生の姿を見ながら、県や市の行政、大学、高校、生涯学習センター、公民館といった多様な機関の関係者とともに、時には激しくぶつかり、時には励まし合いながらやってきたことが決して無駄ではなかったことを実感したものである。

平成9年2月、カレッジの事業は無事終了し、同時に文部省からの補助金もなくなったが、生き生きと学ぶ受講生を見続けてきた関係者の間からは、この事業をやめようと言う声はまったく出でこなかった。すぐに次年度からは、県と開校する市が半分ずつ事業費を出し合うことで「淡海生涯カレッジ」の継続実施が決定し、現在に至るのである。

3. 淡海生涯カレッジはなぜ続いたのか

平成8年にカレッジが開校してから20年。最近では、3年程で事業が終了する事例が多い中で、これだけ長く続いている事業はあまりないのではなかろうか。カレッジが地域に根付き、継続できたのには、次のような理由があったと考えている。

(1) ネットワークの力

近年の人々の学習ニーズの多様化・高度化は著しく、単独の機関のみでそれらに対応することには限界がある。淡海生涯カレッジの事業は、各々の機関が抱える限界を乗り越え、もう1段階高いレベルの学習機会を人々に提供するための実験的な試みであった。「教育委員会」と、「公民館」、「高校」、「大学」といった教育機関とのネットワークの力が、事業の質を高めるとともに、事業をここまで継続させてきたのである。

もし、カレッジが「公民館」単独、あるいは「大学」単独の事業として実施されたのであれば、予算の面からも、また企画者の負担の面からも、18~20回にも及ぶカレッジのプログラムを長期にわたって維持することは難しかったであろう。それぞれの機関が、それぞれの特色を出しながらプログラムを作成し、それを組み合わせて一つのまとまりのある学習機会を提供するシステムだからこそ、20年もの間、7ヶ月以上にもわたる学習機会を無理なく継続することができたのである。

(2) 事業を支える人の力

私は20年、淡海生涯カレッジの「大津校」と「草津校」に関わってきたが、その間、いろいろな人たちとの出会いがあった。そうした人の多くは、たぶんこの事業がなければ出会うことはなかったであろう。教育委員会の生涯学習課の人たち、公民館の人たち、生涯学習センターの人たち、高校の先生たち、そして大学の先生たち、誰ひとり欠けても今のカレッジは存在しなかった。

例えば、この事業が県民に受け入れられるかどうかもわからないような時から、このカレッジに魅力を感じ、必死になって周りを説得しながらカレッジの立ち上げに尽力してくれた人がいた。最初、大津校1校だったカレッジのシステムを県内各地に広げていくために尽力してくれた人、また、まだよちよち歩きだったカレッジを長きにわたって、わが子のように大切に育て、今のシステムを確かなものにしてくれた人もいた。

「問題発見講座」の実施にあたっては、「大津校」の場合、36の公民館すべてにカレッジに関わってもらおうということで、2年ごとに実施する公民館を交代することにしてきた。しかし、どの公民館が担当しようとも、これまでの社会教育事業のノウハウを生かしながら、知恵を絞って、毎年魅力的な講座を企画してくれた。

「実験・実習講座」では、「大津校」では毎年1つの高校が、「草津校」では市内の6つの高校が1回ずつ担当してきた。どちらの校でも、高校の先生たちは忙しい仕事の合間をぬって講座の準備をし、そして受講生にいろいろな経験をさせてくれた。「実験・実習講座」に対する受講生の満足度の高さは、日頃なかなか経験できないことを経験できたという新鮮さとともに、講座を企画し実施してきた高校の先生の熱意のゆえかもしれない。講座を担当したある教員が当時の状況を記した文章がある。その一部を引用してみよう。

○さて、夏休みになると、講師を引き受けた先生方の教材開発に力が入っていた。講師を引き受けた先生方に出会うと、「生涯カレッジの準備のために、今年の夏は忙しい」という悲鳴が聞こえてきた。実験・実習講座は、学校の

外に受講生を連れ出し、生きたフィールドで実習を行うものが多い。仮に実験室での実習であっても、実験材料はあらかじめ、琵琶湖などの自然の中から調達してくるので、その準備は学校外に出て行くことになる。すべての講師が、夏の暑い中をそれぞれのフィールドに下見を兼ねて、教材開発研究に時間をかけておられた。淡海生涯カレッジがここまで成功したのは、それぞれいろいろな部署で多くの方々のご尽力があったお陰であるが、その中の一つに、講座を引き受けた高校教員の努力があったことも忘れないで欲しい。私自身も水質検査に関する研究論文や実験書など書籍を買い込んで、実際に川へ行って水を採取し、予備実験を何度となく繰り返した。また、講師同士がお互いに助手になって、事前準備を手伝うこともあった。たとえば、私は、第4回の講座の準備のために、講師のI先生と実習助手のTさんと一緒に、琵琶湖を一周して、13カ所もの地点で水質調査を行ったり、プランクトンを採取したりした。途中、器具を川に落としてしまい、探し回っているうちに、ずぶ濡れになったことが、今ではいい思い出になっている。

そして、毎年10回に及ぶ「理論学習講座」を提供するために、大学の先生たちもそれぞれの専門の立場から最新の知識や理論を受講生に教授してくれた。大学生ではなく、社会人を相手に話をするというので、ふだん以上に資料の作成に時間をかけた先生もけっこういたようである。「大津校」、「草津校」では、平日の大学の授業も「理論学習講座」に含めているが、正規の授業にカレッジの受講生を快く受け入れてくれた先生もいた。

こうしたカレッジの事業を支える人たち一人ひとりの思いが、淡海生涯カレッジのプログラムの質を高め、事業を継続させてきたのである。

(3) 受講生の力

淡海生涯カレッジには、開校から20年たった今でも、多くの校に定員を上回る応募者がやってくる。これは、カレッジが地域から受け入れられている証拠であり、その事実がカレッジの継続を後押ししている。また、実際に受講した人のプログラムに対する評価も高く、そのこともカレッジ関係者が実施を継続する大きな力となっているといえよう。毎年、受講生にカレッジを受講しての感想文を書いてもらっているが、この感想文の中には、カレッジで学んだ受講生の素直な気持ちが込められている。

以下では、その一部を紹介し、受講生がカレッジでの学習にどのような感想をもっているのかをみてみよう。

- 学ぼうとする人たちとも仲良くなり、年齢の層を超えて学ぶ時間を共有することができ、自分自身を高めることができました。生涯を通じて個人が学べることは微々たるものであり、だからこそ、いろいろな経験・知識・意識をもった人達が、淡海生涯カレッジに集まる意義は大きいといえるでしょう。また、こうして学んだことを、身近な環境に生かす意味は大きいと思います。「グループ学習」では、「地域河川の自然環境に対して人間の関わり」という課題に取り組み、河川の現状把握、生活者の環境意識、態度等、取材を重ねました。これからは、持続可能な循環型社会の実現に向けてより多くの人

環境問題に関心を示していただけるよう、地域での環境保全の推進役として、さらなる努力をしていきたいと思ひます。

- 淡海生涯カレッジでの学習お疲れ様でした。私は幼稚園の教員ですが、当初は自分が興味ある環境学習について何か子ども達に伝えられることはないかな？と思ひ、参加させていただきました。実際自分が得られる情報も限られていたため、この「淡海生涯カレッジ」に参加させて頂けたことで、いろいろな学びがあり、とてもうれしく思っています。この内容をすべて教えることはできませんが、その中でも身近なところで「水を大切に」「ものを大切に」「生き物を愛護する心をもつ」等、子ども達のわかる範囲で伝えていこうと思ひます。
- ほとんどの人達がそうであると思ひますが、少しの参加費で各学習内容のすべてにおいて立派な先生達が講義していただいたことに対して本当に驚かされて、私どものように無知な者は敬服いたしました。その講義内容はわかりやすく、まさしくこれからの生涯の生き方におおいに役立たせていただけるものばかりでありました。また、同時に、県生涯学習課の目的であり、今回のカレッジの目的であります地域活動への支援に役立つものでした。これからも、受講いたしました知識をさらに発展させまして、今後の自身のキャリア形成と各地域の活動への支援を目指していきたいと思ひます。
- 毎回ワクワクしながら楽しく学びました。本当にあっという間の約半年でした。この機会でないとなかなか見学できない所がみれたり、体験できない内容を学べたりと、毎週充実していました。一番印象に残るのは、やはり後半の「グループ学習」です。自分たちが「知りたい」と思ふことについて、様々な場所に出かけ、様々な人に調査を行いました。活動を通じて、「行動してみる自分」に、一歩近づけたような気がします。そして何よりも、普段はなかなか交流のない、人生の先輩と一緒に学び、お話を聞いたことがすばらしい経験でした。
- 地球温暖化やオゾン層破壊等、地球規模の環境問題が日常的に取りざたされ、私たちはそれを避けて通ることはできません。この度の淡海生涯カレッジでは環境問題を多岐にわたる課題で学ぶことができ、大変有意義でした。特に、実験・実習講座では、先生方が熱心にご教授くださり、楽しく学ぶことができました。ここで学んだことをこれからの生活の中で、また地域で生かしていけたらと思っております。

受講生の感想文からは、カレッジで学ぶ中で喜びや楽しさを感じ、そしてその学習成果を何らかの形で生かしていこうという彼らの思いが伝わってくる。そして、こうした受講生の言葉が、われわれカレッジスタッフを「来年もまたがんばってやっぺいこう！」という気持ちにさせてくれるのである。

4. おわりにーこれからのカレッジの課題ー

淡海生涯カレッジのこれからの課題は、やはり、ここで学んだ人びとがその成果を様々な形で生かすことをどう支援していくかである。特に、カレッジの主要なテーマである「環境問題」の学習の目的は、学びを通して環境についての知識を身につけることだけでなく、環境問題の解決のために具体的に行動する人を育てることにある。淡海生涯カレッジの価値も、ここでの学んだ人たちがそれをどう生かしたによって決まるといえよう。

カレッジでは、開校当初から、閉校式では必ず、修了者に対して学習成果の活用場の情報を提供し続けてきた。そうすることで、彼らに学んだ成果を具体的な実践へと結びつけるきっかけを与えたいと考えたのである。

また、私は、受講生が学んだ成果を生かすための支援策の一つは、学びを通して「仲間づくり」だと考えている。上述した、受講生の感想の中に出てくる「グループ学習」を、「理論学習講座」に取り入れたのも、受講生が相互に学び合うことを通して、カレッジ修了後もともに活動していける仲間をつくってほしいという願いがあったからである。実際、グループ学習からは、いくつも自主学習グループが生まれている。体系的に学び続けてきた自信とともに、カレッジでの学びの間に深めてきた仲間との交流・絆が、受講生が学習の成果を実際に様々な形で生かしていく原動力になっているのである。

平成18年に改正された教育基本法では、生涯学習について「国民1人1人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことができる社会の実現が図られなければならない」と規定した。われわれが目指すべき生涯学習社会は、人びと一人ひとりが生き生きと学ぶだけでなく、その成果を様々な形で生き生きと生かすことができる社会であり、それを通して人も社会も豊かになる社会である。

こうした社会の実現に向けて、淡海生涯カレッジはこれからも、県民に、豊かな学びの機会を提供するとともに、その学習成果を生かして地域や社会を豊かなものしようとする人びとを生み出す事業として発展していくことを期待したい。

【参考文献】

- 1) 『地域における生涯大学システムに関する研究開発』滋賀大学生涯学習教育研究センター、1996年
- 2) 文部省生涯学習局『地域における生涯大学システムの整備についてー地域における生涯大学システムに関する研究開発報告書ー』1997年
- 3) 神部純一「淡海生涯カレッジの実践ー大学・高校・公民館をつなぐー」『月刊社会教育（4月号）』国土社、1998年、49～55頁
- 4) 淡海生涯カレッジ10周年記念事業実行委員会・滋賀大学生涯学習教育研究センター『淡海生涯カレッジの挑戦ー学びと生かしの創造、10年の軌跡ー』2006年
- 5) 住岡英毅、梅田修、神部純一『地域で創る学びのシステムー淡海生涯カレッジの挑戦ー』ミネルヴァ書房、2009年